

【佳作】

# 私の耳

鹿島 奈央 (兵庫県 兵庫県立須磨友が丘高等学校 3年生)

ある朝、突然左耳が聞こえなくなつた。小学四年生の時だった。ある土曜日の朝、目覚めると何か聞こえにくいと感じ、右耳を押さえてみると何も聞こえなかつた。聞こえるのは耳鳴りだけ。私は突然の出来事にパニックになり、すぐに母親に症状を伝えて近所の病院に連れて行ってもらつた。検査など色々したが原因が分からず、大きな病院を紹介され、その日からほとんど毎日病院へ通つた。見たこともない機械や検査、点滴。原因が分からない耳の病気にとても不安を感じた。そして数日後、私は突発性難聴だと伝えられた。難聴の中でも私の年齢で発病するのは珍しく、これといった治療法も無かつた。私は病院のトイレで泣いた。もう左耳が聞こえない、なんで私がかんな思いをしなければならぬのだらう。これからは右耳だけで生活をしなければならない不安や、完治するのかも分からない恐怖感。そんな私を母親はずっと慰め、「治るように一緒に頑張ろう。」と声をかけてくれた。当時の担任の先生もとても心配して気にかけてくれ、友人たちはいつもと変わらず楽しい話を沢山してくれて、小学生だった私はそんな気遣いの有難みが、あまり分かつていながつたが、今思い返すと私は色々な人たちに助けられ、周りの人々にとても恵まれてい

たと実感している。お医者さんもそうだった。はつきりとした治療法がない中で、私の耳のために様々な治療法を考えてくれた。多いときには週三回、土日の休みの日も病院に通い、私は治らないうらう聴力のためにこんなに頑張っても意味がないと思うこともあつた。どうせこれをして治らない、どうせ変わらない。自分でも分からないような速さで物事が進み、自分の症状を受け入れられないまま、そんな考えをしてしまうことが増えた。

片耳で生活していく中で苦労したことは、普段何気なくしていた事がやりづらくなる事や、出来なくなつた事だ。ふいに耳元で話されても分からない時がある事や、静かな所だと自分の耳鳴りが気になつて集中出来ない事、聴力検査では左耳が全く聞こえないので数人でする検査をいったん止められてしまい、友人に不思議がられる事。そんな苦労の中でも一番困つたことは、左側にいる人の話がよく聞こえないことだ。わざわざ自分が右側になるように動くのは不自然。何度も何度も聞き返すのは自分も相手も嫌な気分になり、どうすればいいのか分からなかつた。他の人からすればこんな小さい悩みと思われるかもしれないが、私にとつてはいつも気になり、モヤモヤする大きな悩みだった。「どうせ話しても分かつてもらえないだらう。」という気持ちになり、誰かに話すこともしなかつた。

ある日私は思いついた。左側で聞こえないならば、自分が相手の顔を見ながら話を聞けば、少しは聞こえやすくなるかもしれない。その日から、聞こえにくいと感じた時には、相手の顔を見るようになった。すると、相手の表情や勢いが見え、前よりも聞こえるような気がした。ちょっとした事ではあるが、私は嬉しくなつたのと同時に顔を見て話を聞くことで、新しく得るものがあることを知ることが出来た。これは私の左耳が聞こえるままだった

なら気付いていないかもしれない。それからは、自分の病気を受け入れようとし始めた。

高校三年になって聴覚障害者について調べる機会があった。今まで病気のことを心のどこかで少し避けていた部分があったが、私と同じ症状の人について知りたいと思ったのがきっかけだった。調べていくうちに、私なんかとは比べ物にならないほど苦労している人や、私と同じ悩みを抱えている人、様々な人を知ることができた。私の考えが変わった。今までは「私だけ」「どうせ」と否定的に捉えることが多かった。だが、私以外にも苦労している人や悩みを抱えている人は、知らないだけであって沢山いた。私だけではないと実感し、安心した。聴覚障害は見た目でわかる障害ではないため、理解されにくいことを自分自身で思い知った。この体験を私は将来の夢に生かしたい。私の将来の夢は看護師になることだ。耳の聞こえない患者さんに寄り添い、他人には言いづらい患者さんの意志や気持ちを聞いてあげられる看護師になりたい。私の片耳が聞こえないことで共感できる部分や、助けてあげたいと思う気持ちは他の誰よりも強い。これからは片耳難聴だから「できない」「困る」という否定的な考えをすることをやめ、片耳難聴だからこそ出来ることをもっと探していきたい。そして私の一番の理想は一人でも多くの人に寄り添い、助けてあげられ、他人のために何か行動できる大人になることだ。片耳が聞こえなくなったからこそできたこの夢を叶えたい。